日本リハビリテーション栄養学会
Japanese Association of Rehabilitation Nutrition
News Letter
Vol.41
2026年6月

第16回リハビリテーション栄養学会学術集会開催について

第16回日本リハビリテーション栄養学会学術集会大会長　飯田 有輝

第16回日本リハビリテーション栄養学会学術集会を、2026年12月19日（土）に愛知県名古屋市のウインクあいちにて開催いたします。本大会のテーマは「リハビリテーション栄養で未来を拓く」です。大会長を務めさせていただくとともに、実行委員長の宇野千晴先生（名古屋学芸大学）をはじめ、実行委員一同、鋭意準備を進めております。

近年、超高齢社会の進展とともに、低栄養、サルコペニア、フレイルといった課題は、医療・介護のあらゆる場面で重要性を増しています。こうした中で、栄養とリハビリテーションを統合的に捉えるリハビリテーション栄養（リハ栄養）は、患者の生活機能やQOLを支える中核的概念として発展してきました。リハビリテーション栄養3.0やリハ栄養診療ガイドラインの整備により、評価や介入の標準化は着実に進んでいます。一方で、多疾患併存（multimorbidity）の増加や、個別化された目標設定、さらには最適介入量（optimal dose）の確立など、依然として多くの課題が残されています。今後は、これらの課題に対して、より精緻な研究と実践の深化が求められています。

本学術集会では、基礎から臨床、そして実践へとつながる場として、最新のエビデンスと現場の知見を共有し、リハ栄養のこれからを皆様とともに考えていきたいと考えています。特に、一症例を大切にしたセッションを企画しており、多職種による議論や交流を通じて、新たな視点や連携が生まれることを期待しています。

今回は久しぶりの12月開催となります。今年のクリスマスは、ぜひ名古屋で“未来”を語りませんか。名古屋は日本のちょうど真ん中に位置し、東西の文化が交わる中で独自の発展を遂げてきた都市です。ものづくりの文化が根付き、新しい価値観を生み出してきた土地でもあります。こうした「融合」と「創造」のエッセンスは、本大会のテーマとも通じるものがあると感じています。

また、名古屋といえば食文化も大きな魅力です。味噌カツやひつまぶし、手羽先といった「名古屋めし」は全国的にも知られていますが、ぜひ本場の雰囲気の中で味わっていただき、その奥深さを実感していただければ幸いです。学術的な議論のみならず、こうした交流の時間も含めて、実りあるひとときとなることを願っています。

本学術集会が、リハ栄養のさらなる発展につながり、ひいてはすべての対象者における生活機能の向上とQOLの改善に寄与する契機となることを願っております。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

第15回リハビリテーション栄養学会学術集会に参加して

東京女子医科大学病院　看護部　大塚 有希子

今回、第15回リハビリテーション栄養学会学術集会に、開催地である金沢で参加させていただきました。歴史ある街並みと落ち着いた雰囲気が印象的な金沢の地で、「リハビリテーション栄養で支えるレジリエンス」をテーマとした、現地ならではの活気や多職種の熱意に触れることができ、大変貴重な経験となりました。

多くの興味深い企画の中でも、心理面のリハビリテーション栄養に関する企画や、褥瘡とリハビリテーション栄養のセッションが特に印象に残っています。いずれも日々の臨床につながる有益な内容であり、多くの方と共有したいと感じました。また、私自身も一般演題でポスター発表の機会をいただきました。

退院後もリハビリテーション栄養が続くよう、急性期病院の看護師として入退院支援部門と連携した退院支援の症例について報告し、貴重なご意見をいただくことができました。

石川県の能登半島地震に関連した報告では、発災直後の混乱した状況の中、限られた物資や人員、環境の制約がある中でも、被災者一人ひとりの栄養状態や嚥下機能に配慮した支援が行われていることが紹介されていました。食事形態の調整や水分管理、低栄養の予防といった基本的なケアであっても、平時とは異なる難しさがあること、また多職種が連携しながら柔軟に対応していくことの重要性を改めて感じました。災害という状況においても、リハビリテーション栄養の視点を持ち続けることが、被災者の生活機能の維持・回復につながることを学び、強く心に残りました。

日々の臨床の忙しさの中で見失いがちな視点を改めて振り返る機会をいただき、現在は今回の学びを目の前の患者さんに少しずつ還元しているところです。今後も、患者さんにとって必要であると考えたことには躊躇せず、多職種と連携しながら、リハビリテーション栄養の真の実践に取り組んでいきます。

現地で高い志を持つ看護師をはじめとする多職種の方々と出会えたことも、大きな刺激となりました。東京リハ栄養ネットワーク研究会や栄養サポートナースの会などを通じて、今後も日頃から皆様とつながりながら、ともに学びを深めていけたら嬉しいです。

日本リハビリテーション栄養学会論文賞のお知らせ

名古屋学芸大学管理栄養学部　宇野 千晴

日本リハビリテーション栄養学会では、リハビリテーション栄養の発展に寄与した優れた研究成果を顕彰することを目的として、本学会正会員を筆頭著者とする特に優秀な論文に対し、「日本リハビリテーション栄養学会論文賞」を贈呈しています。2026年3月14日に金沢にて開催されました第15回日本リハビリテーション栄養学会学術集会において、論文賞の表彰式が執り行われました。

昨年度もリハビリテーション栄養の臨床実践および学術的発展に大きく貢献する多数の優秀な論文の応募があり、論文賞選考委員会において、慎重かつ厳正な審査が行われました。いずれの論文も独創性、臨床的意義、学術的価値に優れており、選考は大変難航いたしましたが、審査の結果、以下のお二人が受賞されました。

社会医療法人令和会　熊本リハビリテーション病院　サルコペニア・栄養支援センター　長野　文彦先生
論文タイトル：Cachexia defined by the Asian Working Group for Cachexia 2023 criteria as a determinant of functional recovery in post-stroke patients capable of oral intake
掲載誌：Arch Gerontol Geriatr. 2025 Oct:137:105921

社会医療法人財団董仙会 恵寿総合病院 臨床栄養課　小蔵 要司先生
論文タイトル：Malnutrition and 1-Year All- Cause Mortality in Older Residents at an Integrated Facility for Medical and Long-Term Care
掲載誌：Journal of Japanese Association of Rehabilitation Nutrition 9(1) 78-87 2025年5月

今年度も論文賞の選考を予定しております。応募要項につきましては、学会ホームページおよびメーリングリストにてご案内いたします。多くの皆さまからのご応募を、論文賞選考委員一同、心よりお待ちしております。

論文賞選考委員長　宇野千晴

リハ栄養研究基礎講座の開催報告

Caresso　コンサルタントナース　永野彩乃

5月30日に「リハ栄養研究基礎講座」を開催いたしました。本講座は、2018年、2019年に開催した「リハ栄養研究デザイン はじめの一歩」をリニューアルしたもので、臨床研究初学者を対象に、半日で臨床研究の基礎を学び、リサーチクエスチョンとPECOを考えることを目標として企画しました。当日は、「臨床研究の流れ」「研究倫理と倫理申請」「先行研究の調べ方とリサーチクエスチョン」「研究デザイン」「研究をはじめるときのコツと学会発表」をテーマに講義を行い、臨床研究を始めるうえで必要となる基本的な考え方を学ぶ機会としました。また、講義だけでなくグループワークの時間を設け、参加者それぞれが日々の臨床で感じている疑問を言語化し、リサーチクエスチョンとして整理したうえで、PECOに落とし込む演習を行いました。

グループワークでは、ファシリテーターのリードのもと、参加者同士で意見交換を行いながら、自身の臨床疑問を研究につなげるための視点を深めることができました。特に、漠然とした疑問をどのように研究可能な問いとして整理するか、対象・曝露・比較・アウトカムをどのように設定するかについて、活発なディスカッションが行われました。

開催後のアンケートでは、ほとんどの受講者から「参加目的を達成できた」「非常に満足した」との回答をいただきました。なかでも、ファシリテーターとともに臨床の疑問をPECOに整理していく過程が学びになったという感想が多く寄せられ、講義と演習を組み合わせた本講座の意義を実感する機会となりました。

臨床現場には、研究につながる多くの疑問があります。本講座が、参加者にとってリハビリテーション栄養領域の研究に一歩踏み出すきっかけとなれば幸いです。来年度以降も、臨床研究に取り組む初学者を支援する講座として、継続して開催できるよう検討してまいります。

書籍紹介

社会医療法人　原土井病院　中道 真理子

私が紹介する本は、若林秀隆先生が4月24日に出版された『幸福寿命』です。健康寿命とは異なる「幸福寿命」という概念は、なんとなく生きにくい現代社会を生きやすくしてくれる一冊です。リハ栄養の概念を提唱されてきた若林先生の当初からの想いが、「幸福寿命」という言葉に凝縮されています。長寿社会において第2・第3の人生の意味を問われる私たちにとって、深く納得できる言葉です。本書では、幸福寿命を延ばすための具体的な行動指針が示されています。人生の苦労や喜び、そこでの意思決定や行動が「それで良かったのだ」と肯定される視点は、読む人それぞれの人生を静かに励ましてくれます。そして、幸福寿命を延ばす方法として若林先生が勧める最強の第１歩が「運動」です。運動が身体だけでなく幸福度そのものに深く関わることを、リハビリテーション科医としての豊富な臨床経験と科学的根拠をもとに丁寧に解説しています。さらに運動に続くプチシリーズが読む人を幸福に導いてくれる一冊です。

サーベイランス調査について

恵寿総合病院　小蔵 要司

日本リハビリテーション栄養学会では6月、学会員の皆様を対象に、「第11回サーベイランス」を実施いたします。今回のテーマは**「リハ栄養を深ぼる」**です。リハ栄養は障害者やフレイル高齢者の栄養状態・サルコペニア・フレイルを改善し、機能・活動・参加、QOLを最大限高めるための包括的な実践として発展してきました。その一方で、実臨床では身体機能や栄養状態のみならず、患者・利用者の心理面、社会背景、多職種連携のあり方など、複雑で多面的な課題に直面する場面も少なくありません。そこで今回のサーベイランスでは、従来の栄養管理やリハ介入の実態把握に加え、心理・社会・チーム連携という視点から、現場でのリハ栄養実践を深く掘り下げることを目的としています。具体的には、患者・利用者の意欲や生活環境への配慮、多職種間の情報共有、チームアプローチにおける課題や工夫などについて調査を行います。リハ栄養の実践は、施設種別や職種、地域によってさまざまな特徴があります。その実態を可視化し、現場の知見を共有することは、今後のリハ栄養の質向上や新たなエビデンス構築につながる重要な一歩となります。また、日々の実践の中で感じている課題や工夫を広く集約することで、現場に根ざした学会活動や教育活動にも活かしていきたいと考えております。本サーベイランスは、会員の皆様一人ひとりのご協力によって成り立つ大切な取り組みです。ぜひ多くの学会員の皆様にご参加いただき、現場の声をお寄せいただけますと幸いです。なお、ご回答いただいた方には、感謝の気持ちを込めて抽選で景品をご用意しております。皆様からいただいた貴重なご回答を通じて、リハ栄養のさらなる発展と実践の深化につなげてまいります。ぜひ第11回サーベイランスへご協力のほどよろしくお願いいたします。

『リハビリテーション栄養診療ガイドライン2026』刊行に寄せて

熊本リハビリテーション病院　　吉村 芳弘

このたび、本学会誌『リハビリテーション栄養』第10巻第1号に、『リハビリテーション栄養診療ガイドライン2026』が収載されました。2018年版の公表から8年が経過し、リハビリテーション栄養を取り巻く臨床・研究・制度環境は大きく変化しました。超高齢社会の進展、急性期から回復期、生活期・在宅へと続く医療・介護連携の深化、低栄養、サルコペニア、フレイル、カヘキシア、摂食嚥下障害などが重なり合う臨床課題の増加により、栄養療法とリハビリテーション医療を統合して考える必要性は、これまで以上に高まっています。

本ガイドラインでは、前版から継続する脳血管疾患、大腿骨近位部骨折、がんに加え、COPD、摂食嚥下障害、強化型運動療法、栄養管理、口腔管理、薬学的介入、入院関連サルコペニア、健康の社会的決定要因（SDH）を含む11領域を取り上げました。

CQ 12項目、BQ 5項目、FRQ 3項目を設定し、エビデンスが比較的蓄積した課題、現時点で臨床的整理を要する課題、今後の研究が求められる課題を区別して示しています。

作成にあたっては、Minds「診療ガイドライン作成マニュアル2020 ver.3.0」に準拠し、多職種からなる作成委員会とシステマティックレビューグループを編成しました。また、患者・家族代表の参画、外部評価委員による査読、関連学会からの意見聴取、利益相反管理を通じて、透明性と実装可能性を重視しました。ガイドラインは臨床判断を拘束するものではありません。個々の患者の病態、生活背景、価値観、医療資源を踏まえ、多職種で最善の方針を検討するための共通基盤です。

会員の皆さまには、ぜひ本ガイドラインを各施設・地域の実践に照らしてお読みいただきたいと思います。評価、診断、目標設定、介入、モニタリングの流れをチームで共有し、日々の症例検討、教育、研究、質改善に活用してください。そして、まだ十分なエビデンスがない領域については、会員一人ひとりの臨床疑問と実践が、次のガイドライン改訂を支える研究課題になります。

活動報告

総合南東北病院リハビリテーション科・総務課広報室　折内 英則

当院では2006年から多職種で構成されるNST委員会が院内に設置されています。一方で、当院リハビリテーション（以下、リハ）科では2011年からNST委員会と連携する形で「リハNSTチーム」が活動を行っています。対象者の運動機能やADL・QOLならびに参加・活動に必要な栄養評価を行っています。実際には、NST委員会が既に介入している対象者用に使用している「NSTカンファレンス対象者評価シート」に、リハ担当者が、運動機能やADL能力、リハゴールなどを記載し多職種で共有しています。また、リハスタッフからみて低栄養リスクがあると思われる対象者を抽出する「栄養リスク者拾い上げシート」も同時に運用しています。これにより、「栄養からみたリハ」と「リハからみた栄養」をそれぞれ検討できる体制を構築しています。2025年8月からは、NST委員会で脳血管疾患患者の栄養リスク者抽出強化を目的に脳神経外科カンファレンスとNST委員会の連携システムの運用が始まりました。リハ栄養は対象者の抱える課題や現象を多職種で診断推論することが重要であると感じます。それをより効果的に行える体制整備を今後も続けていく考えです。

論文紹介

明海大学保健医療学部口腔保健学科　金久 弥生

Effect of the Presence of Registered Dietitians and Dental Hygienists on the Body Weight and Activities of Daily Living of Elderly Patients with Low BMI in a Kaifukuki (Convalescent) Rehabilitation Ward. Japanese Journal of Comprehensive Rehabilitation Science. Vol 16,46-52,2025. /doi.org/10.11336/jjcrs.16.46
回復期リハビリテーション病棟における管理栄養士と歯科衛生士の配置が低BMI高齢患者の体重および日常生活動作に与える影響：後ろ向き観察研究

本論文は、回復期リハビリテーション病棟において、管理栄養士（RD）と歯科衛生士（DH）の配置の有無が、低BMI高齢入院患者の日常生活動作と体重増加の関連について調査した後ろ向きの観察研究です。回復期リハビリテーション病棟協会による2022年度実態調査のデータより、回復期リハビリテーション病棟入院料1算定病院に入院した70歳以上・BMI20未満の低BMI高齢患者 3,329名を対象に、管理栄養士および歯科衛生士配置群と管理栄養士単独配置群の2群に分類し、FIM利得、BMIの変化、BMI改善（≧0.7 kg/m2の増加）の割合を比較しました（年齢・性別・疾患・入棟時BMI・認知FIMなどを調整）。解析対象は3,329名（女性61.8%，平均年齢83.3 歳 ）となり、RD+DH+配置群は431名、管理栄養士のみ配置（RD+DH-）群は2,834 名でした。FIM は多くの因子に影響されることからFIM利得については両群間で有意差は認められませんでしたが、BMIの変化とBMI改善割合については、RD＋DH＋群の方が有意に高く、栄養管理に加えて歯科衛生士による口腔健康管理（歯科疾患を原因とした口腔機能低下や加齢に伴うオーラルフレイルやサルコペニアなどへの対応）が、食事摂食量を高め、低BMI高齢患者のBMIの変化および改善に寄与した可能性が示唆されました。回復期リハビリテーション病院への歯科衛生士の配置数はまだまだ多くないため、歯科衛生士を含めたリハ栄養実践例および回復期リハビリテーション病院への歯科衛生士の配置数増加が必要だと考えます。

今月の数珠つなぎ

群馬リハビリテーション病院　狩野 幸子

私は2017年に日本リハビリテーション栄養学会（当時リハ栄養研究会）へ入会し、東京で開催されていたリハ栄養フォーラムに参加しながら学びを深めてきました。リハ栄養に関心を持ったきっかけは、90代の廃用症候群患者さんとの出会いでした。リハビリにより順調に回復していたにもかかわらず、ある時期から急に体調が悪化し、リハビリが継続できなくなりました。当時はリハビリと栄養を結びつけて考えていませんでしたが、体重減少や栄養状態の低下に気づき、「栄養が足りていないのではないか」と考えたことが、リハ栄養を学ぶ原点となりました。その後、当院にはNST活動がなかったため、その必要性を院内で訴え続け、院長をはじめ多職種の協力を得てリハビリテーションNST委員会を立ち上げることができました。現在は、院内でのリハ栄養への関心をさらに高めるための啓発活動に取り組むとともに、地域の高齢者へ運動と栄養の大切さ、とくにたんぱく質摂取の重要性を伝えていきたいと考えています。また、日頃の実践をまとめて発表し、スタッフのモチベーション向上にもつなげていきたいと思っています。

第16回　日本リハビリテーション栄養学会学術集会

会期：2026年12月19日（土）
会場：ウインクあいち（愛知県産業労働センター）
演題登録期間：
7月13日まで演題受付中

編集後記

群馬大学医学部附属病院
市川佳孝

6月となり、蒸し暑い日が増えてきました。皆様におかれましては、体調管理に十分お気を付けください。今号のニュースレターでは、多くの会員の皆様にご協力いただき、さまざまな活動や実践をご紹介することができました。ご執筆いただいた皆様に心より感謝申し上げます。リハ栄養は病院や施設、在宅、地域など多様な場で実践されています。本ニュースレターが、皆様の日々の活動や新たな取り組みの一助となれば幸いです。次号もどうぞお楽しみに。